

古墳壁画の保存活用に関する検討会（第25回）議事要旨

1. 日時 平成31年3月22日（金）13:30～15:30

2. 場所 文部科学省3F1特別会議室

3. 出席者（委員）

和田座長、梶谷副座長、泉委員、小林委員、佐藤委員、染川委員、高鳥委員、
豊岡委員、成瀬委員、林部委員、銚井委員、松本委員、三浦委員、三村委員、
宮下委員、森川委員、矢島委員、柳沢委員

甲元装飾古墳WG座長

（事務局）

文化庁：村田次長、杉浦審議官、小林文化資源活用課長・古墳壁画室長、大野文化
財第二課長・古墳壁画室室長補佐、川島文化資源活用課課長補佐、宇田川
古墳壁面对策調査官、青木文化財調査官、横須賀文化財調査官、川畑文部
科学技官 ほか

独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所：山梨副所長、早川保存科学研究センター副センター長、犬塚
保存科学研究センター分析科学研究室長、佐藤保存科学研究センター生物
科学研究室長、早川保存科学研究センター修復材料研究室長、外間研究支
援推進部長 ほか

奈良文化財研究所：玉田都城発掘調査部長、高妻埋蔵文化財センター長、石橋飛
鳥資料館学芸室長、廣瀬都城発掘調査部主任研究員、内田文化遺産部遺跡
整備研究室長、城田研究支援推進部長、津田研究支援推進部連携推進課長
ほか

京都国立博物館：降幡保存科学室長

4. 概要

（1）開会

（2）委員及び出席者紹介

（3）議事

① 高松塚古墳及びキトラ古墳の保存活用について

・石橋飛鳥資料館学芸室長から資料2「古墳・壁画等の複製品を用いた展示活用について」の説明があつた。

森川委員：ようやく具体的な複製の内容に関わる話が出てきて非常にありがたい。村が期待していることは、石室空間をぜひ感じていただけるようにしてほしいことが一つ。高松塚古墳壁画が被葬者からどのように見えるか、あるいは、石室空間内でどのように絵を描いたのかが、複製から感じられるようにしてほしい。もう一つは、高松塚古墳壁画の細密性をどのように伝えていくか、これについても議論を深めてほしい。

佐藤委員：複製をつくる際は、目的に応じた複数のものがあると思う。また、見せ方についても、移動可能なビデオカメラを石室内に設置し、遠隔操作できるシステムなども検討してもよいのではないか。

小林委員：当初の色を復元したものも、複製の一つにあってもよいと思う。

- ・内田遺跡整備研究室長から資料3-1、早川修復材料研究室長から資料3-2、高妻埋蔵文化財センター長から資料3-3、佐野保存科学研究センター長から資料3-4について説明があった。

成瀬委員：X線回折装置を使った実際の壁画の分析はいつから始めるのか。

高妻センター長：現在装置を組んでいる最中である。まずは、壁画を想定した試験を行い、その結果を検討会に示したうえで、よい結果ができれば次年度取り掛かりたい。

柳沢委員：キトラ古墳壁画の十二支・辰を覆っている泥の厚さはどれくらいか。また、肉眼で泥の盛り上がりなど、壁画の存在を確認できる状態か。

高妻センター長：泥の厚みは1mm程度である。肉眼では泥の盛り上がり等は確認できない。

- ・宇田川調査官から資料4、5について説明があった。

柳沢委員：高松塚古墳壁画修理の進捗状況などについて更なる情報発信に努めてほしい。また、初めて見学する人に対して、今までどのように修理が進められたか伝える工夫をしてほしい。

森川委員：キトラ古墳壁画について、発見以来非常に難しい状況をクリアしたなかで国宝指定を受けることに感謝申し上げたい。一方で、もっと初めての方に見ていただく努力、例えば海外からの旅行者、団体旅行者などに見ていただく方法を開発していただきたい。

染川委員：キトラ古墳壁画の修理で用いた最先端の技術などについても、発信する工夫をみせてほしい。

宇田川調査官：現在、キトラ古墳壁画公開のパンフレットや、壁画非公開時の展示パネルなどで発信しているが、コンテンツの拡充に努めたい。

② 装飾古墳の保存活用について

- ・甲元装飾古墳WG座長から資料6について説明があった。

和田座長：この報告書でやっと現状把握できる段階にきた。ただ、今年1月に発生した地震で被害を受けた江田船山古墳石棺の例もある。

甲元WG座長：熊本地震における石之室古墳の被害をみたときに、同様の整備を行っている江田船山古墳も検証しなければならなかった。しかし現状は、江田船山古墳石棺の被害から、被害が熊本地震によるものか今年の地震によるものなのか、区別がつかなかった。日頃からのモニタリングが課題と思っている。

和田座長：日頃のモニタリングについてそれぞれの管理する自治体等が頑張る必要があるが、全体として国のバックアップがあるとありがたい。

甲元WG座長：自治体単位でやると専門家や対応できる担当者の数も極めて限られている。中には担当が1人だけという自治体や、江田船山古墳のある和水町は、考古学や文化財について専門的なトレーニングを受けた人がいない。国指定の装飾古墳を抱えている自治体だけで何とかしてほしいというのは正直言ってきびしい。また、科学的なデータを検証

できる人も限られており、各自治体がばらばらにやるとその人に集中する。できれば、各自治体ではなく、県や国で調整するなど配慮いただきたい。

大野文化財第二課長：熊本地震により被災した装飾古墳への今後の対応については、各自治体で有識者会議が設置・開催されている。文化庁としても熊本県とともに引き続き地元の会議を支援してまいりたい。高松塚古墳、キトラ古墳で得られた知見を復旧のために活用してまいりたい。また検討会でも折々情報共有を行う予定である。

柳沢委員：将来起こる災害に備えるべく、石室の図面などの基礎データの蓄積が重要である。チェックシートなど、基準の導入を検討してほしい。

・川畑文部科学技官から資料7について説明があった。

甲元WG座長：江戸時代に惣庄屋であった嘉島町有馬家文書について、熊本地震の後レスキューされて熊本大学に持ち込まれた。資料整理の過程で、井寺古墳の正確な記録と、それを熊本藩に提出した文書の控えが出てきた。現在石障しか確認できないが、記録ではコの字型に屍床を巡らせて、また屍床の仕切り石や奥壁の天井石が記されていた。また、藩から有馬家に対して、遺物類はきれいに梱包して付近に埋めるようにという通達も発見された。

その後、その遺物が熊本市立博物館から、出土地不明ということで3つ出てきた。また、記録にあった石室の内部構造については、古墳の周囲から石材が発見され、それに装飾があり、状態や構造が初めてわかった。文化財レスキュー事業と遺跡のあり方が一致した幸運を報告する。

和田座長：井寺古墳は装飾古墳を代表するような古墳であり、古文書によって、当時見つかったときの様子がわかることは非常に興味深い。これからの復旧を考えると非常に難しく、これから長期にわたって地元の方に事業を進めていただくことになるだろう。

③ その他

・宇田川調査官より参考資料1について説明があった。

森川委員：高松塚古墳の整備については昔から強く要望をしており、この12年間で本当に美しく、修理や復元が進められた中で、次のステップについてもぜひこの検討会で検討いただきたい。また、明日香村には暫定一覧表記載文化遺産があり、その中の構成要素としてお願いしている案件でもあるので、先々のことも確認いただきながら、整備、公開施設等の在り方の検討を、より足を速めるよう心からお願いしたい。

村田文化庁次長：村長からの話のとおり、文化庁としても10年越しの大プロジェクトであった。高松塚古墳壁画の修理は、来年度で終了する予定で、一つの節目を迎える。そうすると、次のステップに向けて検討を進めていかなければならない。既に検討会ではそうしたことも念頭に置きながら、長期的なことも含めて専門家の先生方にアドバイスを頂いたところである。また、先ほどいろいろな側面から多くの方々に見ていただきたいという話もあった。技術的には復元、複製の技術も非常に進歩しており、いろいろな見せ方ができるようになっている。文化庁としては次のステップに向けて検討をさらに進めてまいりたい。ぜひ引き続き検討会の先生方の御指導を頂ければと思っている。

佐藤委員：井寺古墳の被災状況の写真など、本当に心痛むところであるが、遠い将来も考えな

がら、しっかりとした手法で復旧していただければと思う。その点、熊本県や市町村も大変だとは思いますが、文化庁にはぜひ協力していただきたい。

甲元WG座長：装飾古墳には彩色したものと浮き彫りしたものがある。浮き彫りはある程度の年月が経過しても大丈夫だが、緊急な対応を要するものは彩色のある古墳である。彩色に泥水など付着してからの劣化が激しく、それをどのような対応が可能なのか考えていただきたい。

宮下委員：1点目は、レプリカなど耐久性のあるものについては、写真撮影を許可いただくようにしてほしい。イタリアでは数年前にすべて写真撮影を解禁しており、観光への効果や観覧客の鑑賞の目の深さも明らかに高まっている。

2点目は、キトラ古墳壁画の乾拓板で湿拓の体験ができるようぜひ挑戦してほしい。高松塚古墳壁画やキトラ古墳壁画のデリケートで精緻な世界は、湿拓を通じてのほうが理解しやすい。

3点目は、キトラ古墳壁画公開のパンフレットに玄武の写真が載っているが、現在では質感（凹凸）のある印刷が技術的に可能であるため、検討していただきたい。

柳沢委員：先ほど村田次長から平成31年度で壁画修理が終わるということで、次のステップに向けた検討という話があったが、この検討会の在り方や、何を扱うかを含めて変わってくるのではないかと。急ぎではないが、高松塚古墳壁画修理の終了とともに、検討会自体が何をどう扱っていくかそろそろ考えていくべきなのかなと思っている。

和田座長：私からも一つだけお願いがある。文化財の保存活用が叫ばれば叫ばれるほど、また、自然災害が増えれば増えるほど、保存科学の研究者や、その技術を持っている人にかかってくる要求がすごく多くなる。そういう人を少しでも増やしていただくというのが大事なことのひとつかと思うので、何とか実現していただければ非常にありがたい。

今いらっしゃる方でも、全国中走り回っていてもまだ人手が足りないという状態だと思う。それは市町村に入っただけならば一番、せめて県に採用されていただければありがたいので、ぜひお願いしたい。

(4) その他

事務局から、次回の開催については平成31年度前半、明日香村での開催を考えており、後日、調整票をメールで送信することを連絡した。

(5) 閉会

(以上)